
竜と小さな魔術師

桜野猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜と小さな魔術師

【Nコード】

N3083BA

【作者名】

桜野猫

【あらすじ】

5歳の誕生日に一人で初めていく裏の森！そこで人知れずに魔術の練習をするつもりが、たまたまドラゴンのタマゴを拾ってしまった……

(誤字脱字や、矛盾しているところなどあつたら出来る限り早く対応いたしますので、気付きましたら協力お願いします。)

ちよつと特別な朝(1)

ちゅんちゅん、ちゅんちゅんと外で小鳥が鳴いている。

まだ夜が明けてそれほど経っていない時間だ。

いつも僕はこんなに早く起きない。

普通は使用人が起こしに来るまで起きない。

起こしに来てはすぐには起きないけど。

そんな僕がなんで今日こんなに早く起きたのかというと、今日は僕の5歳の誕生日だからだ。

もう昨日から楽しみで楽しみで仕方がなかった。

夜寝るときでさえ、わくわくですぐには眠れなかつたくらいだ。

そんなに何が楽しみかかって？

それは今日やつと裏の森に一人で行くのを許してもらえるのだ。

少し前にお母様に裏の森に一人で行きたいといったらお母様は、最初は困ったようにしていたが僕が何度も言い続けたら、

「んー、なら5歳の誕生日がきたらいいわ」

と渋々約束してくれた。

裏の森に動物がいるのでお母様はきつと心配しているんだろう。

でも僕には魔術があるからいらさない心配ってもんだ！

お母様は僕が魔術使えるの知らないと思うけどね。

裏の森なら、気付かれずに魔術の練習が出来そうだから、裏の森に一人でいけるようになるのは、すごく嬉しい。

部屋で魔術の本を見ながら小さな魔術は練習していたんだけど、もっといろんな魔術を試してみたくなったのだ。

今すぐに裏の森に行つて、魔術を試したいけど、勝手に行つたら一人で行くのを禁止にされてしまふかもしれない。だから今は我慢あるのみだ。

そして森に行つてやりたいことを考えながら、にやにやしているうちに半刻（約1時間）ほど経ちやっとなんが起きてくる時間になった。

僕は森へ行く許しをもらつたために一目散にお母様の部屋にむかつた。

ダーツと効果音が付きそうなほど勢いよく走っていたら、

「あつお嬢様、廊下を走つてはいけません！」

と、使用人のサキさんが注意してきた。

サキさんは僕が生まれる少し前に働き始めた使用人さんだ。えーっと確か16歳とかいつてた気がする。

・・・たぶん。

今度聞いてみよう。

「早くお母様のところに行つて裏の森に行く許しをもらいに行きたいのー！」

サキさんの言葉に、僕は足を止めずに返事する。

「もう・・・お嬢様つたら・・・」

後ろでサキさんが、諦めた感じがきつと気のせいだ、うん。

あ、そうだ。

「サキさん、おはよう!」

あぶないあぶない、朝のあいさつを忘れるところだった。
しゅくじょたるもの朝のあいさつを忘れちゃだめだもんね。
……しゅくじょってなんだがよくわからないけど。

「あっはい。おはようございますお嬢様」

サキさんは一瞬驚いた顔をして、笑顔で返してくれた。

「じゃ、サキさんまたあとでねー」

僕はサキさんにビシッと敬礼して、今度こそお母様の部屋に走って向かった。

「ほんとにお嬢様は元気いっぱいですねえ・・・」

サキさんはため息混じりにつぶやいて仕事に戻った。

ちよつと特別な朝(2)

僕はコンコンとお母様の部屋の扉をノックした。

「誰かしら？」

お母様のまったりした声が聞こえた。

お母様の声がいつも以上にまったりして聞こえるのはきっとお母様が起きたばかりだからだろう。

「ぼ……わたしです、お母様」

「……危なかったあ。」

僕なんていったら、お母様に、

『女の子なんだから僕って言っちゃダメでしょ』
つて怒られてしまう。

「あら。クーちゃん？どうぞー入ってきて」

僕はその声で扉を開けてお母様の部屋に入る。

お母様はやっぱりまだ寝巻き姿で眠そうな目をしている。

そしてお母様の隣では妹のエアルがまだ気持ちよさそうに寝ている。
「……よだれをたらして。」

まあ、まだ2歳だから仕方がないかな。

そしてこの人が僕のお母様のカリン・オルトレアだ。

2児の母とは思えないほどに若いし美人だ。

僕のちよつとした自慢だ。

でも少し前、出来心でお母様に何歳か聞いたらなんかすごく怖い笑顔をされた。

あまりにも怖かったのもう聞かない。
だってすごく怖かったもん……。

そして僕は、クーリア・オルトレア5歳だ。
お母様だけはいつも僕のことをクーちゃんと呼ぶ。
それが結構気に入ってたり。

「あの、お母様。今日僕の5歳の誕生日です、裏の森に行っても、
いいですか……？」

僕は少し上目遣いで、そわそわしながら聞く。

「んー、そうねー」

お母様は少し考えるようなそぶりを見せ、

「朝ごはんを食べたらいいわ」

「ホントですかお母様！」

僕はすごくうれしくて、お母様に勢いよく抱きついた。
するとお母様は、ゴフツツと言ってベッドに横になって動かなくな
った。

なんだろう、眠っちゃったのかな？

やっぱりまだ眠かったんだね。

「そうだ！ サキさんに朝ごはんまだか聞いてこよう」

僕は来たときと同じく走ってサキさんのところに向かった。

.....

.....

『……くーちゃん。……おそろしい子』

カリンは、クーリアが部屋から出て行ってから一人うめいたが、それは誰にも届かずただ空しく部屋に消えた。

「おかあしゃまうるしい」

そして寝ぼけたエアルに止めとばかりに蹴りを入れられていた。

.....

「サーキさん」

僕はちょうど食器を並べ終わったばかりのサキさんに飛びついた。

「うひゃあっ！」

サキさんがすごい声を上げて僕をぶら下げたまま飛び上がった。さすがサキさんだ！

「おおおおお、お嬢様!？」

「今日の朝ごはんなあに？」

僕はサキさんのテンパってるのをわざと無視して朝ごはんを聞く。

「あの、えっと、あのですね。今日は.....」

本当は朝ごはんのメニューなんてどうでもいいのだ。

だってサキさんが作るごはんはどんなものでもおいしいもん。

今は森に行けることがうれしくてうれしくて、だからちょっとはしゃいじゃってるのだ。

いつもはこんなにアバレテナイデスヨ？

おいしい朝ごはん

おいしいものを食べたら幸せだと思う。

誰だっておいしいものは好きはずだ。

少なくとも僕はおいしいものが大好きだ。

だっておいしくないものを食べるならおいしいものを食べたほうがいいでしょ？

だから僕はおいしいものを食べたらすっごく幸せな気持ちになれるんだ。

サキさんのごはんはすっごくおいしいと思う。

でも最初は料理をしたことがなかったらしい。

サキさんに料理を教えたのが、お母様だって言ってた。

ってことは、お母さんのごはんもおいしいのかな？

おかあさんがごはんを作ったことないからすっごく気になる。

今度お母さんに聞いてみよう。

ベッドに横になって考えてたら、誰かがコンコンと扉をノックしてきた。

「お嬢様、朝ごはんが出来ましたよ」

ごはんができたって呼びに来てくれたみたいだ。

「はい。すぐ行くー」

僕は返事をして、ベッドからでる。

あ、よだれふいとかなきゃね。

食堂に入ると、

「あー、おねえさまがきたー」

一番最初にエアルが僕に気付いた。

「おはよう、クーリア」

「クーちゃん、おはよう。アルちゃんが待ちくたびれてたわよお」

次にお父様とお母様が僕に気付く。

「おはようございます。お父様、お母様。」

お父様とお母様に朝のあいさつをする。

お母様の向かい側の席に座ってるのが、僕のお父様のカラル・グル・オルトレアだ。

礼儀にはちよっときびしいけど、すごくやさしい。それにかっこいいし、自慢のお父様だ。

あ、そういえばさっきお母様の部屋に行ったときあいさつするの忘れてた……。

お父様の隣が僕の席だ。

僕の前席は妹のエアルの席。

そしてお父様とは逆の隣の席にサキさんが座っている。

昔は、使用人の私が一緒の席で食べるなんてできませんっていつて
たみたいだけど、お父様が説得して一緒に食べるようになったら
いい。
みんなで一緒に食べたほうがおいしいのに、なんで嫌がってたんだ
ろうね。

今日の朝ごはんは、白パンと野菜がいっぱい入ったスープだ。
おいしそうな匂いでよだれが出そうだ。
すぐにでも食べたいが、ごはんの前には感謝の言葉を言わなきゃ
ダメだ。

「大地の精霊に感謝します」

「かんしゃします」

みんながお父様に続いた。
言ったあとみんな食べ始める。

「はい、アルちゃんあーん。」

「あーん。もぐもぐもぐ」

エアルはごはんを口いっぱいに入れて、ほっぺをぱんぱんにしてい
る。

僕はそれを見て、動物みたいだなーって思いながら食べ始める。

スープはもちろん、白パンもサキさんの手作りだ。

朝ごはんの前に焼いているらしい。

だからパンはあったかくてふわふわでおいしいのだ。
サキさんが作るごはんはやっぱりおいしい。

すぐおいしくて、すぐ自分の分を食べちゃう。
僕の前のお皿は、きれいにからっぽだ。

森へ行く準備

「そうだクーリア、今日は誕生日だったね」

ご飯を食べ終わったお父様が声をかけてきた。

「なら、今日帰ってくるときにプレゼントを買ってこよう。楽しみにしててね」

「本当ですかお父様！」

そういつて、立ち上がりながらお父様は僕の頭を撫でてくれた。

お父様に撫でられるのは好きだ。

すっごくうれしい気持ちになるんだもん。

そして僕のおでこにキスをして、お母様のところに行く。

「じゃあ、僕はそろそろ仕事に行くよ」

と、いつてお母様と抱き合ってキスをする。

朝お父様が仕事に行くときにもいつもしている日課だ。

二人は仲がいいと思う。

仲がいいのはいいことだね。

「どうぞ、旦那様」

「ありがとう、サキさん。じゃあ行ってくるよ」

お父様はエアルにもおでこにキスをしてから、サキさんにカバンをもらって食堂を出て行く。

お父様は朝仕事に行つてから、夕方まで帰つてこない。どんな仕事をしてるんだろう。

ちよつと気になる。

聞けば教えてくれるかな？

みんなごはんを食べ終わったので、サキさんが片づけを始める。

ちなみに一番時間がかかったのがエアルだ。

ついさつき食べ終わったばかりで、今お母様に口をふいてもらっている。

エアルの口をふいてから、お母様片づけを手伝う。

うちのの仕事はお母様とサキさんが二人でやっている。

サキさんは最初お母様が家事をやることをとめていたけどお母様は、

「まあまあ、気にしないで一緒にやりましょう」

と、いつて聞く耳持たなかったらしい。

そしてサキさんは諦めて一緒に家事をやっているわけだ。

それはさておき。

「お母様！ 朝ごはん食べ終わったので裏の森に言ってきていいですか！」

僕は片づけが終わってのんびりしているお母様に、もう少しも待てないとばかりに聞く。

「んーそうねー。約束したものねえ。わかったわ、森にいつてもいいわよ。ただあんまり奥に行ったり川に近づいちゃダメよ？」

「わかりました、お母様」

やった！

やっと森に行くことができる。

これでもっと大きな魔術の練習が出来るぞ！

よし、そうと決まったら部屋に戻って準備しなきゃ。

「じゃあ、お母様。ぼく・・・わたしは部屋に戻って準備してきます！」

そういうと同時に（むしろ言いながら）、僕は急いで自分の部屋に戻る。

「あらあら、クーちゃんは元気ねえ。それにしても森について何するのかしらねえ」

なんてお母様の、のんきな声が食堂からした。

僕は部屋に入って、動きやすい服に着替える。

昨日から用意してあったカバンに魔術書を入れて、部屋を出る。

あ、そうだ。

サキさんに朝のパンをもらってお弁当にしよう。

残ってるかな？

部屋を出て、食堂に行く。

えーっとサキさんは、と。

あついた。

どうやらキッチンでお昼の仕込みをしているようだ。

「あの、サキさん。朝のパンとかある？」

朝の白パンをもっていけばおべんとうにはちょうどいいだろう。

「パンですか？ えーっとひとつだけ残ってますね。どうするんですか？」

サキさん、はいどうぞって僕にパンを渡しながら聞いてきた。

「えっとね、お弁当にお昼に食べるの」

僕はもらったパンをカバンにしまう。

「言ってくだされば、お弁当作りましたのに」

「朝食食べたパンがおいしかったからこれでいいの」

僕は笑顔でそういうと、サキさんは少し照れくさそうにしていた。

魔術のお勉強

「お母様行ってきます！」

庭までついてきたお母様に僕は言った。

「気をつけるのよ。ぜーったいに川に近づいちゃダメよ？ いい、わかった？」

「大丈夫です。川には近づきません」

「んー。おねえさまどこかに行くのー？」

お母様が、念入りに僕に注意をする。

庭になんかしてたエアルは、ちょこちょこ近づいてきて聞いてきた。

「えっとね、森に散歩に行くの」

「もりにー？ エアルもいきたい、いきたい！」

「アルちゃんにはまだ早いわねー。もうちょっと大きくなったらね」

エアルはお母様の言葉に、ぶーっ、とほっぺをふくらませる。

このままじゃお母様が、みんなで行きましょう、とか言うかもしれない。

ここはすぐに行く必要がある。

「じゃあお母様、わたしは行きます」

「あんまり遅くなっちゃダメよー」

僕はお母様に、はいと答えて森に行く。

森といっても、そこまで深い森ではない。

動物もウサギのようなおとなしいものしかない。

それにそこまで大きいわけじゃないから、迷う心配もない。

だから、カリンも子供一人でいくのを許してくれたのだ。

べつにカリンが、冷血で子供がどうなってもいいと思っているわけじゃないのだ。

木々でちょうどクーリアが隠れ、クーリアが何をしているか一見しては分からない。

だから魔術の練習するにはちょうどいいのだ。

しばらくあるってたら、少し開けた場所に出た。

ここならちょうどいいかな。

僕は広場のような場所の真ん中に行く。座って、カバンから魔術所を出す。

魔術書は結構重いから持ってくるのに少し疲れた……。

僕は魔術書を開いてちよつとした復習をする。

魔術は基本的には誰にでも使えるものだが、個人の才能や所有魔力の大小などの個人差がある。

さらに魔術には4つの基礎属性と2つの上位属性、そして無属性がある。

さらにそれらの属性の魔術を組み合わせることによってできる複合魔術などもある。

火属性

水属性

風属性

土属性

以上の4つが基礎属性である。

基礎属性は得手不得手があれ、誰にでも使うことができる。

時属性

空属性

が、上位属性である。

上位属性は、誰にでも使えるものではない。

得手不得手以前に資質が無ければ全く使うことが出来ないのだ。

普通の魔術の発動は、詠唱などを必要としない。

必要なのはいかに具体的にイメージが出来るかである。

明確にイメージが出来なければ、魔術は発動されること無く不発に終わるのだ。

そして特殊な魔術として、魔法陣を描き発動する儀式系魔術がある。魔方阵に意味を持たせ、術者は魔力を注ぐだけでいいわけだ。

この本すっごくむずかしい・・・書いてあることほとんど分からな
い・・・。

「僕って頭悪いのかな・・・」

そんなこと考えてたらちよつと泣きそうになっちゃった・・・。
本が難しいだけだよね・・・？ ね？

初めて空を飛びました！

つまり、魔術をイメージすればいいんだ。

部屋で小さな魔術は使ったことがあるから、今日はちよつと大きな魔術を使ってみよう。

えーっと部屋で使ったとき、僕と相性がよかった属性は水と風だったかな。他の属性も使えないわけじゃなかったけど、使ったときの感じが少しちがった気がする。

ちなみに上位属性はつかえるかわからない。上位属性のことが本にはほとんど書いてなくてイメージが出来ないんだ。

どんな魔術を使ってみようか。

僕は魔術書を見ながら考える。

やっぱり使うなら相性がいい属性のほうがいいと思う。

そうだ！ 空を飛んでみよう。

空を飛ぶなら風属性だな。

そうと決めればすぐにやってみよう。

まずはイメージだ。

空を飛ぶには、風を自分の周りに作ってその風に乗ればいいかな。

でもちよつとした風を作るとは違う。僕を浮かせられるくらいの風を作らなきゃいけない。

小さな風なら起こせたけど、そんな大きな風を起こせるだろうか。

僕はちよつとドキドキしながら魔術を使う。

イメージするのは大きな風。

僕は目を閉じて、イメージする。

そのイメージに魔力を流す。

すると軽く力が抜ける感じと、体が軽くなった感じがした。僕は目を開けて恐る恐る下を見ると、僕の足は地面についていなかった。

少しだが地面から足が離れ、浮いていた。

「空・・・飛んでる・・・」

驚きとうれしさで、言葉が出てこない。少し間をおいて、

「・・・った、やったああああ！ 僕、僕空飛んでる！！ って、わわっ・・・いたっ」

飛べたのがうれしくて喜んでたら、集中が切れたみたいだ。お尻から落ちちゃった・・・。

僕はお尻をさすりながら立ち上がる。

本当にうれしい、魔術を使えたことがすごくうれしい。

他にもいろいろ試してみよう！

僕はそのあと疲れるまで、魔術を使った。

水柱を作って、竜巻をだし、火球、岩石を作り出した。

やっぱり僕と相性がいいのは、水と風だ。

火と土は使えるには使えるが、魔力を使う感じが断然こっちのほうがおおい。

休憩ついでに遅めのお昼を食べる。

もうパンは冷め切っているが、冷めていてもサキさんが作ったパンはおいしかった。

そうだ！ 帰る前に複合魔術を試してみよう。
そんなに魔力は残ってないから、小さい氷を作ってみる。
氷は、水と土の複合だったはずだ。
水との相性はいいけど、土との相性はそんなに良くない。ちゃんと
できるだろうか。
とりあえずやってみよう。

僕は目を閉じて手のひらに氷をイメージする。
するとさっきよりも少しおおく魔力が使われる感じがした。
次の瞬間手のひらに冷たい感触がした。
目を開けると手のひらにはちゃんと氷が乗っていた。
でも氷のかけらのようなくすぐ小さいものだった。
やっぱり土と相性が良くなかったからなのかな。
そう思ってもう一度やってみるが、今度は何も出なかった。
他にも試してみるが、何も起こらない。
どうやら魔力切れのようだ。

「今日はこれで終わりかあ」

僕はそう一人つぶやいて、家に帰った。

ドラゴンと出会いました。

「お母様ただいまー」

僕は家に帰ってきて元気な声を上げる。

ほんとは疲れてるけどね。

するとすぐにお母様がぱたぱたと足音を立ててやってきた。

「おかえりなさい、くーちゃん。危ないことはなかった？」

お母様はすぐにそう聞いてきた。

心配だったのかな？

「大丈夫ですお母様。何もなかったです」

危ないことも無かったし正直に答える。

「それならよかった。ところで森で何をしてきたの？」

う……どこかたえよう……。

「え、えーと。散歩してきました」

「散歩？ 今までずっとあるってたの？」

うう……やばい疑われてる……。

「っ、疲れたので部屋に戻って休んでいますー」

ここは撤退あるのみだ。
怪しまれようがしつたことかー。

「くーちゃん」

お母様が呼んでるけど、聞こえない振りして逃げる。
部屋に入って、ベッドに横になると、さっきの疲れが一気に襲って
きて、僕は朝まで寝てしまった。

というか、起きたら朝だった。すごいびっくりだ。

朝ごはんを食べたら今日も森に行くかな。

そんなこんなで1ヶ月くらい僕は森にいつて魔術の練習をしていた。
ちゃんと氷も出せるようになったし、他にもちよつと難しい魔術を
使えるようになったりした。
もちろん今日も森に行く。

今日はどんな魔術を練習しようか。

僕は歩きながら考える。

水柱を凍らせてみようか。

などと考えていると、いつもの場所に着いた。

でもなんだかいつもと違う。

なんだろうか？

んー。

あつ！ かなり大きいタマゴが僕の特等席にある。

というか、タマゴ光ってる!？

なんだろう何のタマゴだろう。

鳥・・・かなあ？

でも鳥のタマゴがあんなに大きい分けないし……。
しかも光ってるタマゴなんてそうあるわけないし。
全然わかんない。

とりあえず触ってみよう。

僕はそう決めて、おそろおそろタマゴを触ろうと手を伸ばす。

僕がタマゴを触るか触らないかぐらいのところで、ぴきって音がした。

「うつひゃあつつ！！？」

僕は驚いて変な声を出して、後ろに飛んだ。

僕がそうしている間にもタマゴから音はしつづいて、小さな破片が落ちたりしていた。

生まれるんだらうか？

僕は緊張しながら見ていると、タマゴの上のほう割れてギャアギャアと鳴きながらトカゲみたいな何かが出てきた。

僕はよく見てみる。

……あれ？

えーっとドラゴン？

僕が混乱していると、タマゴを割って外に出てきたドラゴンらしきものがよちよちと僕に近づいてきた。

どうしようどうしよう。近づいてきた。抱っこすればいいのかな？

僕はパニックって、近づいてきたドラゴンを抱き上げてみた。

すると僕の顔をなめてきた。

な、なついているのかな？

あーっと、このドラゴンどうしよう……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3083ba/>

竜と小さな魔術師

2012年1月14日01時00分発行